

彼の「でんき」ということばの意味の範囲には、「でんち」もふくみこまれているのだ。こうしたことだから、彼がまだ「声の文化」のなかで暮らしていることがわかる。そして、オングの著書からも読みとれるように、「文字の文化」が「声の文化」より優位なわけではなく、二つは別の文化なのだ。子どもたちが「声の文化」から「文字の文化」へと住みかえて、ひとりで黙読するようになるのは、（これは個人差が大きいが）小学校三、四年生以降だろう。だから、小学校三年生くらいまでの子どもたちには、あいかわらず、あるいは、さらに積極的に読み聞かせで物語をとどけていと思う。子どもたちに読んであげる「声」は、身体のつづき、いや、身体そのものだ。「声」を聞くのも身体なのだから、そこには、身体と身体のままなましい関係が生まれる。

私には、あるイメージがある。子どもたちの体のなかには、「聞くことのコップ」とでもいうべきものがあるのではないか。読んであげる「声」が、そのコップにそそがれ、やがて、それを満たしたとき、ようやく、子どもは、自立した読者になる……。

それなら、いま、子どもたちにどんな物語を読んであげることができるのだろうか。

「声」のわかれ

〈私は、この欄で、すこしくどいほど、子どものための物語（ことに幼い子どもの文学）は、口で話す「お話」と切りはなせないものだと思ってきました。けれども、私の気もちでは、まだまだ言い足りないような気がするのです。〉
（カッコ内原文）

雑誌『母の友』一九五九年一二月号の「12月の本だな」の欄、「子どもから学ぶこと」と題する石井桃子のエッセイの冒頭である。このエッセイについては、何度か書いたことがあるけれど、簡単にくりかえす。

石井桃子は、つづけていう。――〈読んでやったり、口で話したりできないお話は、子どもにはおもしろくないものです。そして、幼い子どもにとっては、おもしろいことと、いいことはおなじなものですから。〉そして、石井は、この考えにもとづいて、この年の八月に刊行されたばかりの佐藤さとの『だれも知らない小さな国』（講談社）を子どもたちに読み聞かせた。石井の「かつら文庫」でつづきものにして読んだのだ。石井は、『だれも知らない小さな国』をへ日本の創作童話にめずらしい筋の通ったファンタジーとしながら、実際に読み出してみると、〈佐藤さんが、念を入れてコロボックルの出てくる山を、春秋夏冬にかえて、その情景を描写しているあいだ、子どもたちは、